

## 教養基礎教育を考える : 化学教育の視点から (第11回医療短大研究会)

著者	荻野 和子, 学術 委員会
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	8
号	1
ページ	120-121
発行年	1999-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/33698">http://hdl.handle.net/10097/33698</a>

という事実が挙げられる。生活習慣病といわれる上記5疾患の予防が重要であることは言うまでもないが、これらに対する医療の標準化・効率化がますます重要となりつつある。

### 3. Critical Path の医療への応用

以上述べてきたような医療を取り巻く現状から、日本でも Critical Path の有用性が認識されつつある。即ち、

- 1) ケアの標準化・均質化を図ることにより、医療の効率化・質の保証が期待できる
- 2) 医療に携わる多職種が患者に対する行動計画を一目瞭然に理解することができ、これら職種間のコミュニケーションが円滑化・効率化され、チーム医療の充実に期待できる
- 3) Retrospective に疾患のケアを時系列に見て、ケア計画の妥当性を検証することができ、医療の質や効率の向上や在院日数の短縮を図ることができる
- 4) ケア・マップが患者・家族への説明・教育の有効な手段になり、結果としてインフォームド・コンセントの円滑化が図られる
- 5) 医療行為の全てが把握でき、診療報酬請求もれ防止やコストの削減につながる
- 6) 新人職員もケアをもれなく実行でき、業務の効率化や事故防止に有効である
- 7) 退院後に継続すべきケアを確定でき、在宅ケアへの移行を容易にする
- 8) マップが全職種に及ぶため、マップを通じて組織が活性化される

等の有用性が指摘できる。Critical Path は、まず目的・目標を明確にし、各々の医療機関で「実現可能な、そして理想的な医療」について、医師を始めとする関係職種と協議し、作成する必要がある。

Critical Path は、通常の path をたどり経過・予後の予見が可能な疾患を対象とするべきであり、それを外れた症例や重症例は通常のケアに移すか、Case Management の対象となる。一方、Critical Path を作成することにより、医療の効率

化・安全性の向上が期待できる疾患も少なくない。Critical Path の対象としては、以下のような疾患が挙げられる。

- 1) 症例の多い疾患
  - 2) 危険があり、問題を起こしやすい疾患
  - 3) コストのかかる疾患
  - 4) 多くの職種が関わる疾患
4. おわりに

医療供給システムの変革期にあたり、対応策の研究が始まっている。厚生省は DRG/PPS の支払方式を国立病院 8ヶ所、社会保険病院 2ヶ所の計 10ヶ所で実施すると発表している。今後は定額払い制度が年々進む可能性があり、「コストを削減し、かつケアの質を上げるマネジメント」の手法であるクリティカル・パスは日本においてもこれからの研究開発が期待される。

## 第 11 回医療短大研究会

平成 10 年 7 月 2 日 (木) 18:00-19:00

医療短大大講義室

講師：荻野和子先生（東北大学医療技術短期大学  
部総合教育）

演題：教養基礎教育を考える — 化学教育の視点から —

東北大学理学部助手だった時期にアメリカイリノイ大学に留学した。イリノイ大は化学では非常に高いランクになっており、研究面以外でも留学した意義があったと思う。

東北大学理学部錯塩化学講座の教授だった斎藤先生、化学では日本でも有名な大槻先生のグループの方達等高校の先生達と色々な活動をしている。日本化学会では様々な行事があり、教育研究は非常に古く長い伝統がある。東北支部のそういう活動は日本化学会の中では特に盛んであり高い評価を受けている。このような活動は国際会議でも発表した。カーシュナーという先生はミシガン州立大学の先生で、国際会議を主催している。その化学教育部門で「錯体化学の教育的な側面」と

いうシンポジウムがあり、そこで発表した。そうしたところ非常に人気があった。外国の方は非常に教育に対して興味があるということが解った。カーシュナー先生、ブラステッド先生は二人とも錯体化学の先生であるが、教育的な面で有名である。私が医療短大に来る事になった時にブラステッドさんが日本に来られたので、アメリカの化学教育の在り方を聞いたところ、B4の紙にタイプしたものを頂いた。アメリカの大学の一般化学というのはディレクターという人がいて、全体を統括している。

医療短大での私の化学の授業内容はブラウン先生から頂いたジェネラルケミストリーという本が骨子になっている。平成3年度に設置基準の大綱化というのがあって、いろいろな大学の教育が激変した。新しくカリキュラムが改革されたが、そういうのを見ると医療短大の化学の時間数は普通の4年制大学に比べて少なく無いというのが解った。色々と日本の教育が変わって来ている。アメリカの教育については以前ブラステッドさんにお聞きしたが、何となくアメリカもレベルが下がってきていると日本では話をしているので、はたしてどうかと思い1995年秋に視察に行った。

アメリカの大学は非常に種類が多く、高等教育機関というのは3,500程ある。分類によると研究中心大学というのは全体の3%程ある。あと修士だけの大学、リベラルアートカレッジがありここは短大とか学士を出さない教育機関で、数はたくさんある。スペシャライズというのもかなりの数であるが、これはメディカルスクールとか法律とか専門的なものといった所である。日本の場合はどうかというと、日本の高等教育の分類は文部省では大学院、国立、公立、私立それから短大、高専、専修学校という分け方になっている。アメリカの研究中心大学が125ということで、日本の国立大学より少し多くなっている。

アメリカの大学については入るのは易しいが出るのは難しいとよく言われるが、研究中心大学ではそのようなことはなく、入るのにも競争は非常に厳しい。それからアメリカの大学は卒業率とい

う事を誇りにしている。授業は厳しいので非常に勉強しなければ、卒業出来ないということが学生に徹底している。インターネットを見ると化学は授業時間の3倍以上勉強しなければならないと出ている。一般化学の内容であるが、研究中心大学ではだいたい決まっている。化学の履修の順序は、高校から行った時はまず標準枠の一般化学という所に行く。一学期毎に単位は切れているが、二学期に渡って取るのが標準である。有機化学はこれを取ってからでないと取れない。化学を取る学生の多い理由は、アメリカでは医学部は学部を卒業してからメディカルスクールに入る。調べた所どこも一般化学と有機化学と実験を伴って一年ずつ取る事、物理と生物は一年ずつと決められている。新入生の受け入れについては、大学によって様々であるが、だいたい理科2科目が標準になっている。

去年の12月に出された大学審議会の答申では色々な情勢の変化で問題点が多数あって、学部教育の質の確保や学生の質の保証ということが唱われている。アメリカ化学会ではすでに1930年代に化学教育についての基準を作っている。12月の答申は教育機能の充実向上を計ってゆくんだけど、研究面での影響も危惧されるという事も、一応は挙げられていて非常に良く書けていると思う。日本化学会では化学教育という事を重視してやってきており、今は化学教育協議会となっているが、大学のことについてはあまりやってこなかった。しかし今度のように科目数を減らすとかいう話になって来ると、特に今は日本の大学の化学の授業の内容、名前も色々になってしまったし、専門の学科の方も学部や学科の名称も変わって授業科目も色々なので、そういった事について学会での議論が必要ではないかということで、一応化学会の方に提案した。

色々な分野によって違うと思いますので、いろいろな先生のご意見をお聞かせ願えればと思います。

(要約：学術委員会)